論文審査の要旨

報告番号	総論第 12 号		学位申請者	坂口 勝義
審査委員	主 査	杉原 一正	学 位	博士（歯学）
	副 査	佐藤 友昭	副 査	菊地 聖史
	副 査	西村 正宏	副 査	岩﨑 智憲

Association of problem behavior with sleep problem and gastroesophageal reflux symptom
（問題行動と睡眠障害および胃食道逆流症状との関連）

近年、青少年における問題行動が社会的問題となっている。問題行動の関連因子として、睡眠障害ならびに胃食道逆流症状の関与が示唆されているが、日本の青少年の問題行動と睡眠障害および胃食道逆流症状についての疫学調査はいまだ十分な報告がない。本研究では、これらの関連性を解明することを目的に疫学調査を実施し、統計解析を行った。

対象は中学生 1840 名（男：890 名、女：950 名、平均年齢 13.3±1.8 歳）で、問題行動の傾向を判定する Pediatric Symptom Checklist (PSC)日本語版を用いて、問題行動群（PB 群）と正常群（NB 群）の二群に分け、質問紙を用いて得た睡眠時ブラキシズムおよび睡眠に関連する事項、生活環境と食習慣に関する事項ならびに Frequency Scale for the Symptoms of GERD (FSSG)を用いて得た胃食道逆流症状の得点について、群間で比較を行なった。さらに問題行動への危険因子として調査項目の関連性を検討するため、問題行動を目的変数、調査項目を説明変数としてロジスティック回帰分析を行い、因子を抽出した。

その結果、本研究で以下の知見が明らかにされた。

1．睡眠と睡眠時ブラキシズムに関する事項について睡眠時ブラキシズム、30 分以内の入眠困難、悪夢、睡眠の質の低下ならびに日中の意欲低下の自覚が有意に多く認められた。

2．胃食道逆流症状に関して、PB 群では NB 群に比べ FSSG のスコアが有意に高かった。

3．生活環境と食習慣に関して、PB 群では夕食時の母親の不在、朝食の欠食、夕食時の家族間の会話が 30 分未満である頻度が有意に高かった。

4．ロジスティック回帰分析の結果、調査した 17 項目の中から、睡眠時ブラキシズム、睡眠潜時、悪夢、睡眠の質の低下、日中の意欲低下、夕食時の家族の会話が 30 分以内、朝食の欠食の 7 項目が危険因子として抽出された。睡眠に関する事項の中では、睡眠の質の低下が最も高いオッズ比(12.88 (8.99-18.46))を示し、生活環境・食習慣に関する事項では夕食時の家族間の会話が 30 分以内が最も高いオッズ比(2.80 (1.32-5.99))を示した。すべての因子の中で、睡眠の質の低下の自覚が問題行動に対して最も高い関連を示した。本研究の結果から、青少年における問題行動には睡眠時ブラキシズムを含めた睡眠障害、胃食道逆流症状ならびに生活環境と食習慣が共に関連している可能性が示唆された。

以上から、本研究は学位論文として十分な価値を有するものと判定した。